オペラ評

愛と裏切りのドラマ
技量のを尽くす歌唱

第23回みつなかオペラ「清教徒」

ベッリーニ〝ベルカント・オペラ〟第2弾で、イギリスの清教徒と王党派が対立した時代が背景の愛と裏切りのドラマである。清教徒の城主ヴァルトン（松森治）は娘エルヴィーラ（老田裕子）が愛する王党派の騎士アルトゥーラ（中川正崇）との結婚を叔父ジョルジョ（渡邉寛智）の助言で許す。愛の成就を喜ぶ二人だが、当のアルトゥーラは幽閉されていた前王の妃エンリケッタ（西村薫）の処刑が近いことを知り、挙式直前に逃亡を助ける。恋敵のリッカルド（西尾岳史）が気づくが、エルヴィーラでないことを知って黙認、友人のブルーノ（清原邦仁）がかえ添えで登場したり、序幕の筋は錯綜して騒がしい場面が続くが、花婿の逃亡で花嫁は錯乱して幕が降りる。

© 仲野達也

第二幕は「狂乱の場」。老田の歌唱が聴きどころで、「優しい声がよんでいた」が恋人の裏切りを切々と嘆く。技量の粋を尽くす歌唱にオケ伴も同調、愛の死を表現して出色だった。状況に感じたジョルジョとリッカルドは王党派との対決を誓って男同士の二重唱「ラッパの響き」になるが、これが勇壮で上出来、聴き応えのある一幕にまとまった。

終幕はアルトゥーラがエルヴィーラを求めて帰郷し再会を果たすが、発見されて死刑を宣告される。自己の潔白と愛の真実を説くアルトゥーラの熱い歌唱が呼びもので、期待の高音には無理もあったが、若々しい熱唱はそれなりに魅力的だった。王党派壊滅の知らせでアルトゥーラは恩赦、めでたく大団円を迎える幕切れには時代を感じる。

岩城拓也指揮の合唱団は歌唱も集団の動きも適切で、コロスの役割を果たして印象的。またマストロマッティの装置が秀逸で、高い角柱状の壁を場面転換で組み替えて見せ場を作っていた。牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管は序幕は鳴らしすぎだったが、ベッリーニのスコアをよく読んで、井原広樹の歌唱中心の演出を助けていた。場面のイメージをタブローで印象づける手法も巧みだった。（9月21日、みつなかホール）

（鳴原眞一）